

金壽卿年譜

年	月	日	年齢	事項	備考
1918	5	1	0	金瑄得（1896-1950、慶州金氏、短い判事生活の後、弁護士業を務める）と李素玉（1893-1961）の3兄妹の次男として生まれる。本籍は江原道通川郡通川面西里13番地。兄は金福卿（1913-1974）、妹は金貞娥（1926-）。	遺族情報。
1921	9		3	父が全羅南道光州地方法院群山支庁の判事として赴任。家族が故郷の通川を離れ、群山に移住。	『朝鮮総督府及所属官署職員録』。遺族情報。
1923	10		5	父が平安北道新義州の地方法院判事として赴任。家族が新義州に移住。	『朝鮮総督府及所属官署職員録』。遺族情報。
1924	4	1	5	新義州で普通学校に入学（学校名は不明）。	遺族情報。1925年4月1日に入学し、5年生を修了して卒業した可能性もあり。
1925	6		7	父が新義州の地方法院判事を退職。	『時代日報』1925.7.17。
1925	8		7	父が群山で弁護士を開業。家族の群山転居にともない、群山公立普通学校に転校。	『時代日報』1925.7.17。 遺族情報。
1930	3	31	11	群山第一公立普通学校（1929年に群山第二公立普通学校が設立したことにより改称）を卒業。	遺族情報（卒業証書を保有）。
1930	4	1	11	群山中学校に入学。	遺族情報（通知書を保有）。
1934	3	31	15	群山中学校の課程を4年間で修了。修了前に京城帝国大学予科に入学するための専門学校入学検定試験に合格。	金壽卿が1946年12月28日に作成し、金日成大学に提出した履歴書（以下「履歴書」）。遺族情報。
1934	4	1	15	京城帝国大学予科文科甲類に入学（第11期入学生）。同期の入学者に金錫亨、申龜鉉、李明善、丁海珮、洪璉基などがある。	『朝鮮総督府官報』1934.3.30に合格者名簿。この年度の入学生から予科が2年制から3年制に変更された（『紺碧遙かに』）。

年	月	日	年齢	事項	備考
1937	3	31	18	京城帝国大学予科を修了。	『朝鮮総督府官報』1934.4.7に修了者名簿。遺族情報（修了証書を保有）。
1937	4	1	18	京城帝国大学法文学部哲学科に入学（金錫亨は史学科、申龜鉉と李明善は文学科、丁海珮は哲学科、洪璉基は法学科へ進学。同年、朴時亨が史学科選科生として入学）。 ヘーゲル等の哲学を研究し、小林英夫（1903-1978）の指導の下、言語学を研究。 ロシア語は法文学部の講師であったチルキン（С. В. Чиркин, 1879-1943）から教わったという。	『朝鮮総督府官報』1934.5.11に入学者名簿。 小林英夫「教え子」1951。遺族情報。 李忠雨《京城帝国大学》1980。遺族情報（教室写真を保有）。
1939			21	林和と申龜鉉の勧めにより、Maurice Courant（モリス・クーラン、1865-1935）著『 <i>Bibliographie coréenne</i> （朝鮮書誌）』の朝鮮語翻訳を開始。	『朝鮮文化史序説』凡章閣、1946。
1940	3	31	21	京城帝国大学法文学部哲学科を卒業（哲学科第12回卒業生）。	『朝鮮総督府官報』1940.4.9に学士試験合格者名簿。遺族情報（卒業証書を保有）。
1940	4	30	21	東京帝国大学文学部大学院（言語学講座）に入学。研究課題は「朝鮮語ノ比較言語学的研究」。指導教官は小倉進平（1882-1944）教授（言語学講座担任）。後に指導教官を引き継ぐ服部四郎（1908-1995）は、当時講師として在職。 当時1年間の研修のため東京帝国大学に来ていた梨花女子専門学校教授の李熙昇と交流。当時東京帝国大学の学部留学生に趙承福などがいた。	東京大学文学部の記録。『東京帝国大学一覧』1940-42年版。遺族情報（1942年12月当時撮影した写真が存在）。 李熙昇の自叙伝《再び生まれ変わってもこの道を》1977；趙承福の自叙伝《分断の恨》2004。
1942	2	28	23	京城帝国大学哲学研究室で開かれた哲学談話会第30回例会にて「言語の本質—マルティイに従ひて」を発表。	京城帝国大学文学会「研究室通信」『学叢』第1輯、1943。

年	月	日	年齢	事項	備考
1942			24	春休みにソウルで李明善（京城帝大の同期）と金錦子（梨花女専音楽科卒業）の結婚式に参席。李南載に出会う。李南載は広州李氏の李容復（1895-1966）と宣仁錫（1895-1928）の4兄妹の中の一人娘で、1919年12月18日満州の間島にて出生し、梨花女子専門学校文科を卒業。	遺族情報。
1943	3	17	24	春休み中にソウルで李南載と結婚。その後、東京の豊島区要町で新婚生活。	遺族情報および東京大学の記録。
1943	3		24	小倉進平が東京帝国大学を定年退職。このとき指導教官が服部四郎（助教授に昇進していた）に変わったものと推定される。	東京大学文学部旧制大学院学籍簿の指導教官欄では、小倉進平が削除され、服部四郎が記入されている。
1943			25	夏に妻とソウルに帰り、恵化町74番地に居住。	遺族情報。
1944	1	6	25	長女・金惠慈がソウルで生まれる。	遺族情報。
1944	3	15	25	東京帝国大学文学部大学院を退学。	東京大学の記録。東京大学文学部旧制大学院学籍簿に「一身上ノ都合上退学」と記入されている。
1944	4	15	25	京城帝国大学法文学部朝鮮語学研究室の嘱託、京城帝国大学付属図書館の嘱託を兼任。	履歴書。後段は遺族情報。
1945	3	25	26	報告書『「老乞大」諸板の再吟味』を京城帝国大学法文学部で印刷。	著作目録参照。印刷された初の論文と推定される。
1945	5	28	27	長男・金泰正が生まれる。	遺族情報。
1945	8	15	27	京城大学自治委員会法文学部委員となる。	履歴書。俞鎮午「一片夜話（63）京城大学総長」，《東亜日報》1974.5.14。
1945	8	16	27	夕刻、ソウルの仁寺洞にある泰和亭で開かれた震檀学会の再発足のための会に参加。	金載元「光復から今日まで」，《震檀学報》57号，1984。
1945	8	23	27	鍾路のYMCAにて震檀学会委員会を開催。金壽卿は常任委員（幹事）。	《震檀学報》15号，1947。

年	月	日	年齢	事項	備考
1945	10	9	27	震檀学会が訓民正音頒布記念講演会に李崇寧と金壽卿を派遣。	《震檀学報》15号, 1947.
1945	11	30	27	京城大学嘱託および自治委員会委員を辞任。	履歴書。
1945	11		27	解放後の初論文となる「『龍飛御天歌』挿入子音考」を収録した《震檀学報》15号の原稿を印刷所に送る。出版が遅れ、発刊自体は1947年5月となる。	《震檀学報》15号, 1947.
1945	12	1	27	京城経済専門学校教授に任命される。	履歴書。
1945	12	15	27	震檀学会第2回月例会にて「ソ連アカデミーのための新進学徒の養成」を発表。	《震檀学報》15号, 1947.
1946	2	26	27	朝鮮山岳会主催の済州島漢拏山学術調査隊に、震檀学会が宋錫夏（隊長、震檀学会長）、趙明基、金壽卿を派遣（3月17日まで）。金壽卿は言語学班。	《震檀学報》15号, 1947 ; 《自由新聞》1946.2.26.
1946	3	1	27	京城大学法文学部講師を兼任。 「京城大学予科附設臨時中等教員養成所」および「京城師範学校附設臨時中等教員養成所」にて「朝鮮語学概論」を講義。	履歴書。 崔炅鳳（2009）。金敏洙、姜吉云、南廣祐などが聴講。
1946	3	30	27	朝鮮山岳会が済州島調査報告講演を倭城臺で開催。金壽卿は「言語を通じてみた済州島文化」を講演。	《自由新聞》1946.3.30.
1946	5	6	28	朝鮮共産党（南朝鮮）に入党。高等教育部フラクション。	履歴書。加入時の保証人は、朴時亨および尹炳商。
1946	5	10	28	クーラン《朝鮮書誌》の序論部分の朝鮮語訳を《朝鮮文化史序説》としてソウルで出版。	《朝鮮文化史序説》凡章閣, 1946.
1946	5		28	朝鮮語学会に加入。	崔炅鳳（2009）。「ハンゲル新聞」《ハンゲル》11巻3号, 1947.7.
1946	7	8	28	《朝鮮文化史序説》の出版記念会を開催。	遺族情報（記念会の写真を保有）。

年	月	日	年齢	事項	備考
1946	8	17	28	金日成大学からの委嘱状に応じ、夜に半ズボンと登山帽の服装で家族より先に越北。当時朴時亨、金錫亨の二人の同僚とともに越北した。	小林英夫の随筆「白いハト」1957年に引用された金壽卿の書簡；遺族情報；《ハンギョレ新聞》1990.8.4；《京郷新聞》1990.8.4。
1946	8	19	28	京城経済専門学校および京城大学を辞任。	履歴書。
1946	8	20	28	北朝鮮の金日成大学文学部教員。	履歴書。
1946	10	1	28	北朝鮮の金日成大学附属図書館長を兼任。	履歴書。
1946	10		28	ソウルから呼び寄せた家族と合流。その後、金日成大学の教員社宅4号に居住。	遺族情報。
1947	2	5	28	北朝鮮臨時人民委員会決定第175号により朝鮮語文研究会を組織し、本部を金日成大学に置く。	《朝鮮語研究》1-1, 1949。
1948	3	1	29	次女・金惠英が平壤で生まれる。	遺族情報。
1948	10	2	30	内閣第10号決定書「朝鮮語文に関する決定書」により朝鮮語文研究会を教育省内に設置。文法編修分科委員会（委員長＝田蒙秀、金壽卿は12人の委員中の1人）を組織し、文法書の編纂を開始。	《朝鮮語研究》1-1, 1949； 《朝鮮語文法》1949。
1949	3	23	30	金日成総合大学で開かれた金科奉先生誕生60周年記念会合にて「朝鮮語学者としての金科奉先生」を講演。	《朝鮮語研究》1-3, 1949。
1949	11	28	31	次男・金泰成が平壤で生まれる。	遺族情報。
1949	11		31	副教授の職位を授与。朝鮮民主主義人民共和国で初の副教授という。	《文化語学習》2004-3。
1950	8	9	32	戦争勃発後、党中央委員会の決定により、大学教員からなる短期宣撫工作隊の一員として南派。	遺族情報。
1950	9	25	32	父・金瑣得が群山の人民軍によって虐殺される。	遺族情報。
1950	10		32	家族が南朝鮮に避難。	遺族情報。

年	月	日	年齢	事項	備考
1951	3	3	32	九死に一生を得て平壤へ帰還、家族が既に南下していたことを知る。	遺族情報。
1952	6	20	34	朝ソ文化協会が主催した「イ・ヴェ・スターリンの労作《マルクス主義と言語学の諸問題》発表2周年記念学術報告会」で「イ・ヴェ・スターリンの労作《マルクス主義と言語学の諸問題》と朝鮮言語学の当面課業」を報告。	《労働新聞》1952.6.23。
1952	12	1	34	科学院が設立され、金壽卿は朝鮮語及朝鮮文学研究所の朝鮮語学研究室長となる。	科学院設立過程については金容燮《南北の学院院と科学院の発達》知識産業社、2005。
1953	6	4	35	科学院朝鮮語及朝鮮文学研究所の第1次評議会で、《朝鮮語綴字法》編纂委員会を組織し、草案作成の責任者を金壽卿とすることが決定される。	《朝鮮民主主義人民共和国科学院学报》1954-7。
1953	6	21	35	科学院と朝ソ文化協会が共同主催した「イ・ヴェ・スターリンの労作《マルクス主義と言語学の諸問題》発表3周年記念学術報告会」において「言語学の諸問題に関するイ・ヴェ・スターリンの労作に照らして見た朝鮮語の基本語彙と語彙構成」を報告。	《労働新聞》1953.6.24。
[1953]			[35]	金正順（金日成大学卒業）と平壤で再婚。	遺族情報（金壽卿の手紙）。
1954			36	三男・金泰均が平壤で生まれる。	遺族情報（金壽卿の手紙）。
1955	7	27	37	科学院朝鮮語及朝鮮文学研究所が周時経逝去41周年に際して開催した学術講演会で周時経の生涯と活動について報告。	《教員新聞》1955.7.30。
1955	11	30	37	科学院朝鮮語及朝鮮文学研究所で開かれた中国文化代表团との座談会（11月30日、12月4日両日開催）に参席。	《朝鮮語文》1956-1。
1955			37	三女・金惠媛が平壤で生まれる。	遺族情報（金壽卿の手紙）。

年	月	日	年齢	事項	備考
1956	4	10	37	朝鮮民主科学者協会が結成され（委員長・白南雲）、金壽卿は委員となる。	《朝鮮民主主義人民共和国科学院学报》1956-2。
1956	4		37	この頃、金日成綜合大学の科学研究部長を務める。	《大学新聞》1956.4.26。
1956	9		38	金日成綜合大学《学报》が創刊され、金壽卿は金日成綜合大学編集委員会の委員を務める。	金日成綜合大学《学报》No.1。
1956	10	6	38	科学院言語文学研究所に朝鮮文字改革研究委員会が創立され、金壽卿は常務委員となる。	《朝鮮語文》1956-6。
1956	10	11	38	朝中間の文化交流計画により中国を訪問。科学院文字改革研究委員の資格で、中国科学院の招請を受けて中国を訪問（-1956.12.4）。 中国訪問期間中、日本社会党の国会議員と面会。	《朝鮮語文》1957-2。 『現代朝鮮人名辞典』。手記として「中国言語学界視察旅行記」があるという（遺族情報）。 小林英夫「白いハト」。
1956			38	朝鮮語文編修委員会編集委員。	李得春他（2001）。
1957	10	19	39	科学院言語文学研究所の言語学研究室を中心に形態論の基本的特性に関する学術討論会が開催され、金壽卿は「朝鮮語の〈語幹 ^{マルモム} 〉と吐の特性」を報告。	《朝鮮語文》1958-1。
1958	1	17	39	科学院言語文学研究所の言語学研究室の主催により言語学学術討論会が開かれ、「金科奉同志が提起し金壽卿同志が理論的に体系化しようと試みた《新字母6字》」に対する批判が相次ぐ	《朝鮮語文》1958-2；《労働新聞》1958.1.19。
1958	1		39	ソ連の言語学者マーズル（Ю. И. Мазур、1924-1998）が科学院言語文学研究所で研修（-1959年2月）。滞在中、金壽卿と頻繁に会って意見交換。	《ロシア韓国学》第2巻（《韓国語学》17、2002に翻訳掲載）。
1958	4		39	8月宗派事件（1956年）後に進められた「反宗派闘争」の一環として《朝鮮語文》雑誌上で金科奉とともに批判される。	《朝鮮語文》1958-3。

年	月	日	年齢	事項	備考
				多くの弟子たちの嘆願のおかげで肅清を免れることができたという。	「菅野裕臣のAutobiografia」。
[1958]			[40]	小林英夫が李崇寧に送った金壽卿の生存事実を知らせる手紙の内容が、兄金福卿を通じて妻の李南載に伝えられる。	遺族情報。
1961	2	14	42	母・李素玉がソウルで老衰により他界。	遺族情報。
1961			43	四男・金素雄が平壤で生まれる。	遺族情報(金壽卿の手紙)。
1962	7	19	44	科学院言語文学研究所主催で開かれた学術討論会「朝鮮語の文法構造研究で主体をしっかりと確立するために」(7.19~7.21)に参席。	《朝鮮語文》1962-4。
1963			45	四女・金恵玉が平壤で生まれる。	遺族情報(金壽卿の手紙)。
1964	4	11	45	朝鮮言語学会(会長・金炳濟)が結成され、常務委員となる。また「一般言語学および比較言語学分科委員会」の委員長を務める。	《朝鮮語学》1964-4。
1968	10		50	金日成総合大学から中央図書館の司書に転職。	《文化語学習》2004-3；李得春他(2001)。
1970	7		52	長女・金恵慈夫妻がカナダに移民。	遺族情報。
1972			54	妹・金貞娥の家族がアメリカに移民。	遺族情報。
1973	12		55	次女・金恵英夫妻がカナダに移民。	遺族情報。
1974	1		55	兄・金福卿がソウルで病により他界。	遺族情報。
1974	10		56	長男・金泰正がカナダに移民(その後結婚)。	遺族情報。
1979	3		60	妻・李南載が教職引退後、カナダに移民。	遺族情報。
1980	11	25	62	東北大学学者訪朝・訪中団の一員として平壤を訪問した中村完(言語学者河野六郎の弟子)の短期間の訪問を受ける。	『高句麗の故地をたずねて：東北大学学者訪朝・訪中団報告』東出版寧楽社，1981，33頁。
1982	4		63	人民大学習堂の完工。その後金壽卿は、運営方法研究室長を歴任(-1998年)。	《文化語学習》2004-3。

年	月	日	年齢	事項	備考
1985			67	妻・李南載が、カナダを訪問していた延辺大学の高永一教授の助力により人づてに送った手紙を金壽卿が受け取り、家族の消息を知る。	遺族情報。
1986	1	15	67	カナダの家族に人づてに手紙を送る。その後カナダ在住の家族と郵便で書信のやり取りをしはじめる。	遺族情報。
1988	5	11	70	平壤で開かれた「朝鮮関係専門学者の国際科学討論会」の言語学学科に参加し、発表および司会（議長）を務める。	《朝鮮関係専門学者の国際科学討論会討論集（言語学学科）》1989。
1988	8	24	70	北京で北京大学朝鮮文化研究所と大阪経済法科大学アジア研究所の主催で開かれた「第2次朝鮮学国際学術討論会」（8.24-8.28）に参席。カナダから参席した次女・金惠英と再会。	遺族情報。
1990	8	3	72	大阪で大阪経済法科大学アジア研究所と北京大学朝鮮文化研究所の主催で開かれた第3次朝鮮学国際学術討論会に参席することになっていたが、不参加。	遺族情報（学術討論会言語部会のプログラムを保有）。
1990			72	言語学博士学位を授与。博士学位論文のタイトルは「三国時代の言語歴史に関する南朝鮮学界の見解に対する批判的考察」。	《文化語学習》2004-3；李得春他（2001）。
1991	2	22	72	長女・金惠慈がカナダで病により他界。	遺族情報。
1992	11	6	74	申龜鉉の傘寿を記念して、金壽卿、金錫亨、朴時亨、丁海珮が申龜鉉の自宅に集まる。	遺族情報（写真保有）。写真には「紅顔の青年たちであった半世紀前の日々を回想して」と記されている。
1992	12	9	74	全国から6千名の知識人を集め、金日成・金正日参席のもと開かれた朝鮮知識人大会（12.9～12.12）に参加。	《労働新聞》1992.12.10～13；リ・ギョチュン《人生の絶頂》1996, 221-227。
1992			74	教授職位が授与される。時期は不明だが、〈国旗勲章第1級〉も授与された。	《文化語学習》2004-3。

年	月	日	年齢	事項	備考
1993	7	23	75	朝鮮戦争停戦40年を記念して開かれた全国老兵大会（7.23～7.25）に参加し、記念の勲章を授与される。	《労働新聞》1993.7.24～26；遺族情報。
1993	8	15	75	周囲の人々の勧めにより朝鮮戦争の参戦手記を執筆しはじめる。	遺族情報。
1994	7		76	元山市で開かれた「国際青少年野営大会」にカナダの青少年として参加した次女・金恵英の2人の子女に平壤で会う。	遺族情報。
1994	11	20	76	朝鮮戦争参戦手記《背囊のなかの手帖をひろげて》を脱稿。	遺族情報。
1995	7	21	77	脳卒中を患う。その後、次第に健康が悪化。	遺族情報（金壽卿の手紙）。
1996	7		78	平壤を訪問した長男・金泰正と再会。	遺族情報。
1996	8		78	《主体の朝鮮語研究50年史》発刊を監修（審査）する。	《主体の朝鮮語研究50年史》金日成総合大学朝鮮語文学部，1996。
1996	9		78	長編実話《人生の絶頂》が出版される。また、金正日によって「反日愛国烈士」と認められたという。その他「テレビジョン手記〈矜持〉」が放映されたという。	後段の情報は《文化語学習》2004-3。
1998	7		80	平壤を訪問した妻・李南載と再会。	遺族情報。
2000	3	1	81	平壤で他界。	遺族情報（平壤の遺族の手紙）。

（備考）出典で『』は日本語文献、《》は朝鮮語文献であることを示す。